

一九五九年（四九歳）

一月一日

病院のことは、今年は診療業務に専念したい。病院の理事長は適当な人があれば、その方にゆずりたい。医者であるばかりでなく、学徒にもなりたい。研究もしてみたい。仕事の態度も変えてゆきたい。病院の人たちを愛し、病院の人たちと、もっと遊んでみたい。ともに働く人たちを愛し信じてみたい。みんなに仕事も大胆にいいつけてみたい。

一月五日

東大から佐々木医師着任。

一月十五日

精神病院県医協会を開き、青森市におもむく。席上内田課長と和田教授が感情的対立的議論となる。内田課長から県の施政方針めいたものの説明あり、医療関係の予算が縮くずれになる危険があるので、応援的陳情を頼むとの発言あり注目をひいた。

夜市医師会の理事会。そのあとで新年懇親会。

一月二十日

沿川の三橋君が青森から精神分裂病の患者をつれてきてくれたのは、五、六日前のことであった。患者の母も同道してきて、二人でよろしく頼む、父に死なれたあと、二十六歳になるこの長男が発狂して仕事しなくなった。もう五年にもなる。夫に死なれ長男が発狂された一家の経済を思って下さい、福祉事務所にも相談してみたい、応援して下さいというので、藤森看護人に話して、青森市の保健所と福祉所に葉書を出したところ、今日福祉事務所から返事と連絡があった。それによると、患者の家では七反歩の水田を自作している。家、土蔵、納屋が立派である。植林して二十年を経過した森林が一町歩からある。生活保護などとんでもないとのことであった。

今日病人を見舞いに来た母と三橋君にそのことを話したら、二人ともその通りですと言うのであった。

この患者のために私は五、六日前、本気になって金のないこと、父の死んだこと、発狂したのが長男であることの話しを本気になって長ながときき、そのために藤森看護人も参加して福祉事務所や保健所に連絡をとったりしたのであった。そして連絡をうけた福祉事務所では、津川の野郎、またはったりをかけてよこしたと苦々しい表情になったことであろう。

一月二十三日

午前中大清水のカルテ点検。午後から三上、木村、宮本、金崎の理事、斎藤婦長に来て貰い、大清水病棟の基本方針を二時間に亘って協議する。

二月二十八日

午後、飯詰まで往診、駅に降り立つと耳にぴりりと来る寒気、久しぶりで西北の野に立ったという気持ち。

往診にいったのは〇〇という三十九の男で、発病して復員してきた精神分裂の患者であった。まだ結婚していない。暗い二階の部屋に案内せられた。窓にはこの昼の日中にカーテンがおろされてあった。用意していった電灯をつけるとはげしく動く音がして何者かが立ち上がってカーテンを開いた。天井の低い座敷の真中に患者が洗面しながら立っていた。患者は泡をくって入口に走り出した。どこへ行く、私の後について来た母の言に、小便にゆくと叫んで患者は私の傍をぬけて外に出ていった。

ものの見事な欠陥分裂病である。治療するに來たのではなく恩給診断に來たのであるから私の目的は十分に達せられた。私は診断書をかくに十分な観察を終わった。

診察を終ったあとにこの家の主人が帰ってきた。一週間前に恩給診断書を書いてくれと頼みにきたあの兄さんである。私の診察室に来て、患者は拒否して連れ出すことは出来ないとのことで今日の往診になったのである。

診察を終ったあと、私は余計な世話をしてしまった。

「健康保険はあるでしょう。」

「役所のがあります。」

「恩給診断書と同時に、もう一枚の診断書を書きますから、扶養家族にしたらどうですか。」

私は兄さんにそう申し入れてみた。

「先生の気持ちはありがたいと思います、しかし私には私なりの気持ちもありまして、、、」

そう言って、兄さんは落ち着いた、静かな口調で語ってくれた。こうしてみんなのおかげで四万円からの恩給がついているのですから結構です。弟がこうなったのは運命とあきらめています。母と私たち夫婦と長男のこの子と住んでいます、弟がこうならなければ誰か私たちがこうなるかも知れないのです。私たちの代わりになってくれたのだと思ってみんなに言いかせています。それはそれでいいのですが、私や母に何かあって、妻だとか、息子や、息子の嫁の時代になると手当ではどうしてもおろそかになってきます。それでは困る、そのときのことも考えて、毎年くる恩給には一銭も手を付けずに貯えておきました。私たちに万が一のことがあったとき、それで弟の面倒をみて貰おうと思っているのです。静かに事実を肯定し、それに対する態度も不動になっていたのであった。

六月十三日

ロボトミーの患者死亡する。

八月五日

入院患者、家に外出、自殺

八月二十四日

病院経営の困難の度、次第に増してゆく。みんなの気分いらだつ。

九月二日

三上、宮本の両氏と夜おそくまで病院の対策について相談する。両氏は私財を投げ出してもとの決意をかためている。

九月九日

病院の内部が容易でない。いつもなら何でもなく通ることが人の気持ちを突つつく。木村さんが仕事を放棄している。婦長がやめるといふ。人間についてしきりに考える。

十月五日

それにしても俺は人を愛することを知っているのだろうか。人間を愛したことがあるのだろうか。

十二月十日

吉内の母を往診する。母も年とったものである。皺だらけになり、腰が曲がったというだけではない、見舞いにいった私は車の運転手と重義君をも家の中に入れたのに、その二人と私を前において、父とけんかした話、父にののしられてことなどを力んで語り伝えるのであった。